

転生の秘密 1992年 たま出版

ジナ・サーミナラ

ウィスコンシン大学卒、哲学博士、ローマ大学、ウィスコンシン音楽学校、一般意味論研究所を経て、カルフォルニアで専門分野の私塾を開き心理学、意味論の研究に従事した。

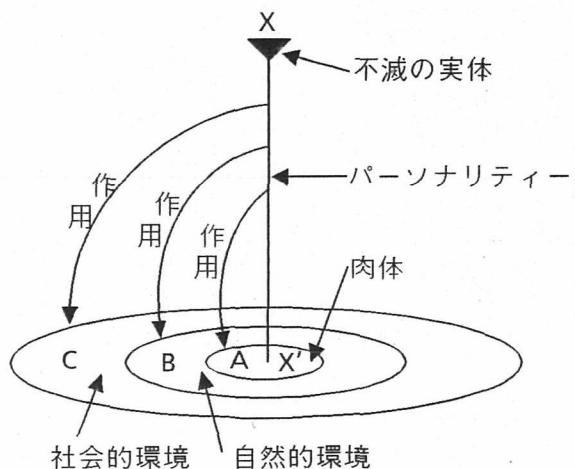
肉体的カルマ

カルマは心理的法則であり、本来心理的な面に作用し、物理的な環境はたんに心理的な目的を果たす手段にすぎない。したがって客観的な物理的な面は正確なものではなく、ただ正確に近いだけであって、心理的な面の方が反作用はより正確である。

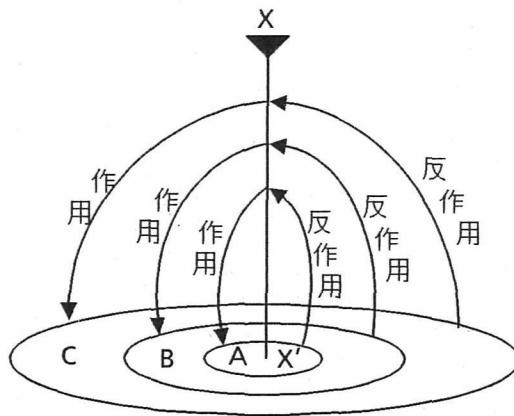
自我が自己の意志をはたらかす主な場は三つあるように思われる。第一は、それ自身の肉体(無数の器官や能力に、またより精妙なより靈的局面へと多種多様に細分できるところの)、第二は、それ自身の自然的環境(あらゆる外的環境の意味における)、第三はその社会的環境(それが関係をもつあらゆる人々を意味する)。

図はこれらの同心円的場をあらわす。

Xは不滅の実体でX'において肉体に化身している。XX'なる実体は三つの主な作用の場に包まれている。いわく、A彼自身の肉体、B自然界、C他の人間。XX'からABCに放射されている矢は、これらの場に影響を与える意志的行為を意味する。



次図はまた、これらの場から生ずる反作用、つまり、もとの行為の結果としてXX'に影響をあたえる反作用をあらわす。したがって、もしXX'が自分の肉体を(A)過食によって酷使するならば、現生または来生において、これと同じ領域から肉体的な反作用を受ける。次に生まれる時に別の肉体をもつかも知れないということは重要な問題ではない。なぜなら作用の場が同じであるから、均衡の転置はどの場においても同様に補正できるからである。



図の説明をなお続けるならば、もしXX'が勝手に森を破壊したり、あるいは鉱物を建設的に使用したとするならば(場B)、その反作用は彼が森や鉱物に与えたものに相当する幸運や不幸となって後に同じ場からもたらされるであろう。

またかりに、XXがその靈胞を(場C)残酷に、あるいは無情に取り扱ったとするならば、その残酷や無情は必ずしもその同一人物からでなく、同じ場から彼のところにはね返ってくるであろう。しかし、この反作用はすぐにその人に影響を与えずに、後に生まれるものに遅れて現れることもあるかも知れない。

ケイシーのリーディングは人間の肉体的苦悩の問題に関して、多くの啓蒙的な思考法を展開してくれたわけである。これらは、われわれの通常の五官の知覚では、茫漠で複雑なつづれ織りのごく一部しか見ることができないということを示しているよう思われる。われわれに見えるなめらかな表面の下には、無数の下糸と無数の眼に見えぬもつれがある。そのうえ、このつづれ織りはあらゆる方向に遠く広くのびひろがっている。いかなる糸も誕生と呼んでいる錯覚上の境界からはじまるものはなく、また死と呼んでいる錯覚上の境界をもって終わるものもない。ある。

嘲笑のカルマ

キリスト教神学における七つの基本的な罪の一つは傲慢である。他の多くの神学上の教義と同様これは知的興味をそそるものだが、しかし人間苦という医学上、実際上の問題には縁遠いように思われる。だが、もしケイシー・リーディングの証言を受け入れるならば、傲慢の罪が非常にはっきりした肉体的な苦しみとして、カルマの結果をもたらすことのあるのを認めなければならない。この傲慢が、嘲笑とか嘲弄のなかに自己を表現するとき特にカルマを生じるのである。残酷な笑みやさげすみの言葉は肉体をもってする攻撃的行為にも等しいものである。それ故、ここに投げ矢のカルマが生じ、嘲笑された人が悩んでいる肉体的苦悩と同じものを結果としてうけるのである。

嘲笑のようなつまらぬことに対して、このように大きなこらしめが与えられるのは一見不つりあいのように思われるかも知れないが、しかしそく考えてみると、それが当然の報いであることは歴然としている。他人の苦しみをあざ笑うもの

は、彼にはわからぬある必要性がその事情のなかにあることを見透すことができずにはいるのである。つまり彼は、あらゆる下劣な愚行を通してさえ自己を進化させようというすべての人のもつ権利を軽蔑したことになるのである。彼は万人に生まれつきそなわっている威儀と価値と神性—たえそれがいまどんなに低い滑稽な状態に陥っていようととも—を冒涜しているのである。さらに加えて、彼はその人に対する自己の優越性を主張しているのである。嘲笑という行為はもっとも下等な意味における自己主張の行為なのである。

停止中のカルマ

肉体的カルマのケースのなかに見られる奇妙な事実は、ある行為のカルマの結果は時とすると、一つの生涯またはそれ以上の間をおいてからあらわれるということである。ここに生ずる問題は、このようなカルマの停止はどうして必要かということである。どうして壁にぶつかったボールがすぐはね返るように、反動がすぐあらわれないのだろうか。

この問い合わせに対しては若干の答があるようである。一つは自我はそれが創り出したカルマをつぐなうにふさわしい時と所を待たなければならないということである。適当な機会があらわれるまで数世紀を要するかも知れない。そしてその間の期間は、その他の性格上の問題が解決されるのに使われるるのである。

心理学の新領域

近代心理学は、人間の相違は第一に両親の遺伝子により、第二には環境の影響によって決定されると考えている。しかしながら輪廻論者の見解によるならば、遺伝も環境とともに前生のカルマのもつ決定要素の結果であって、靈魂のもつすべての性質は両親から遺伝されたというよりは自ら稼ぎとったものである。

遺伝学説には一般に認められていないある誤りがある。遺伝の見解からみると、精神的な現象は生物的な現象によって創ることができると考えられている。「あなたはどういうふうにして相対性理論を発見されたのですか」と問われたのに対し、アインシュタインは「公理を再検討することによって」と答えた。アインシュタインのこの率直な大胆さを憶い出すとき、遺伝学説を支えている根本概念を再検討することが必要となろう。精神と肉体の関係に関する人間の知識はたしかにまだ幼児期にある。しかし精神的な現象は大部分前生における精神的な現象からも生じると信じることの方がより信用できるし、心理学上はるかに健全のように思われる。「お前たちの現状のすべてはお前たちが考えたことの結果である」と仏陀は言われた。仏教という、かの優れた心理学的に精密な宗教においては、輪廻はもちろん主要な教えになっている。仏陀は人間のもつもろもろの性質は、その人の思考様式と前生の行為の結果であると言われた。単純に機械的に考えたとしても個人の能力はただ個人の反復的努力によって得られたものである、と説明することは筋のとおったことである。もし

そうであるならば、現生における人間の能力の相違を前生における人間の努力の相違に帰すことは推論上必要なことである。

人間のタイプの問題

内向性も外向性も、男性女性と同様、両極を象徴しているように思われる。靈魂は時には女のからだに、また時には男のからだに宿り、その両方の性になることによって両極の美德や長所を学ばなければならぬよう、それはまた連続的に人生を重ねるうちに、著しく内向的なパーソナリティーと著しく外向的なパーソナリティーの両方になるのである。もっとも、その究極の目的は内向・外向双方の性質を獲得して両方に向かうようになることがあるのだが。この過程は振子の振動のように続いていって、ついには靈魂は内向と外向という用語がもはやぜんぜん適用しなくなるほどに純然たる感受性と純然たる表現性、純然たる内觀性と純然たる外向性の態度のなかにすばらしくみごとなバランスがとれるようになるのである。

両親と子供

むかしから家庭は父か母の主宰する君守国であった。このような統治権は今日でもなお存在しており、実際にはばをきかせている。事実、唯物的な立場に立つならば、子供は両親の財産とみなされる。母親の犠牲と労働によって創造され、父親の労苦と犠牲によって扶養される。親は子供より肉体的に強く、より成熟しており、はるかに能力があるので、子供を支配するのは親の権利である、というのである。

だが、じつは靈的には子供に対する親の支配権というようなものはないのである。あらゆる生物は広大な靈的社會における平等のメンバーである。靈的に言うならば、親はその子供を所有しているのではない。創造したわけでもない。ただたんに子供を地上の生に呼びましたにすぎない。神祕的な作用が両親の内部で行われ、それがある瞬間に彼らを相手と結合することを可能にし、かくて同じような神祕的な活動が始まると、それが一つの肉体の誕生を招くのである。

この肉体はまたわれわれと同じような靈的存在の棲家となる。しばらくのあいだは彼らは話すことができず無力な存在である。われわれが彼らに対して責任感を感じ世話をすることは、やり甲斐のある仕事である。この仕事は犠牲と愛にみちびく。またもっとも深いやさしさと愛着へとみちびく。これは何らかの形の所有や支配へと発展しないかぎりそれでよいのである。

職業能力の前生的基礎

職業能力の前生的基礎を分析研究するならば、このような能力がすぐ前の前生か、あるいはもっと前の前生に、同じ職業かまたはそれに密接に関係のある職業にたずさわっていたことに基礎があるということができるのである。非常に趣味に熱心な場合は、かつて前生でそれがその人の職業であったことをしばしば暗示している。また一

見新しいと思われる職業の多くは、じつは古代アトランティスやエジプトの芸術や科学の再出現であるということである。ある人々はその人の魂の歴史の中ではじめて新しい職業の分野に就こうとしているように見える。この場合もし過去にそれに対する興味が徹底的にやしなわれているならば、またそれに関係のある能力がすでに開発されているならば、その領域における成功は請け合いである。